様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０２３３８

研究課題名（和文）学校間連携型授業研究ハンドブックの開発

研究課題名（英文）Development of a Handbook for Inter-School Collaborative Lesson Study

研究代表者
廣瀬　真琴（HIROSE, Makoto）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：７０５３０９１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　報告者らは，先行研究などを整理し，Instructional Roundsの要点となる3ポイント6項目を整理した。これらの項目を内包したIR型授業研究の手続きを整理した「授業研究ハンドブック（案）」を開発した。
　IR型授業研究は日本の教師にも高く評価されたこと，そして日本の教師にとっても多様な学びが得られる手続きとなっていることが，試行を通して明らかとなった。また，学校間で教師が学びあうことに資する可能性が高いことも確認されている。以上の知見を踏まえ，要件となる3ポイント6項目をそのまま採用し，具体例や説明を精緻化した「授業研究ガイド」を開発するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本では，現在，学校の小規模化問題に注目が集まっている。学校を専門的な学習共同体（Professional Learning Community）とした場合，コミュニティのメンバーが固定される小規模の閉じた組織では，学びあう内容に偏りや停滞感が生じてくる。このような状況を打開する学校間連携の仕組みづくりが求められているが，本研究は，専門的な学習共同体のネットワーク化に関する実証的な研究と位置付けられる。
　本研究では，試行を通じ，学校種を超えて，授業の観察や分析などを語り合いながら互いに学びあう授業研究の要件を明らかにした。また，要件を踏まえた授業研究ガイドを開発することができた。

研究成果の概要（英文）：　The presenters organized previous studies and other information to identify three points (six items) that are the main points of Instructional Rounds. They developed a "Handbook of Classroom Research (Draft)" that organizes the procedures for IR-type classroom research encompassing these items.
　Through the trial, it became clear that IR-based class research was highly evaluated by Japanese teachers, and that it was a procedure that allowed Japanese teachers to learn in a variety of ways. It has also been confirmed that the IR-type lesson study is highly likely to contribute to teachers learning from each other among schools. Based on the above findings, we were able to develop a "Lesson Study Guide" by adopting the six 3-point items as requirements as they are, and elaborating on specific examples and explanations.

研究分野：教育方法学

キーワード：Instructional Rounds　授業研究　専門的な学習共同体　学校間連携

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在，我が国では，学校の小規模化の問題に注目が集まりつつある。ドーナツ化現象の中心地であれ，地方であれ，小規模校では，人員が乏しく，授業を舞台とした教師の学びあいが困難になる。また，学校を専門的な学習共同体（Professional Learning Community）として捉えた場合，コミュニティのメンバーが固定される小規模の閉じた組織では，学びあう内容に偏りや停滞感が生じてくる。このような状況を打開する学校間連携の仕組みづくりが求められている。

そこで報告者らが注目した営みが，米国を中心に進展しつつある Instructional Rounds（以下，IR と表記）である。医師の回診をモデルとした IR は，複数の学校（３～４校）がチームを組んで活動する。ある学校がホスト校となり，チーム内の他校の教員を迎える。定められた手続きに則って授業を観察・分析し，学校間で授業のモデルを共有すると共に，改善点と具体的な展望を提示しあいながら，共同的に学びあう。ホスト校を順番に担いながら，これを繰り返していく。

この IR は，２つのシステムを有した営みである。それは，連携と，学びあいにある。前者は，チーム内の学校が共通のテーマを有し，それに関連する各学校の課題を共有して訪問しあうというシステムである。後者は，授業の観察・分析・展望の提示に至るまで学校間で共通の手続きを踏むという学びあいのシステムである。

２．研究の目的

本研究の目的は，以下の３点にある。

まず，わが国における学校間連携プロジェクトの事例を収集し，その成果と課題を踏まえながら，連携の構築・発展・維持に寄与する要件（Key Success Factor）を明らかにする。

次いで，子どもたちの学力向上と教員の力量形成を促す海外の優れた学校間連携プロジェクトの営みを訪問調査し，その要件を明らかにする。しかしこの点については，コロナ禍における渡航が困難であった。研究期間を延長するなどの措置を講じたが，研究期間に状況は改善しなかったため，国内における IR の試行を優先することとした。

そして最後に，上記両者の知見を統合し，わが国の学校間連携上の課題解決をコンサルティングする際に関係者が活用できるハンドブックを作成し，公表する。

３．研究の方法

目的達成の主な方法となったのが，IR の試行である。

報告者らは，IR の文献などから，その要点となる 3 ポイント 6 項目を整理した。概説すると，「ポイント 1. 授業を観察しよう」が①何に注目して観察するか，②どのように書き記すかの 2 項目，「ポイント 2. 授業を分析しよう」が③記録を確認しよう（事実の確認），④分析しよう（整理・分析），⑤子どもの立場になって考えて推測しよう（解釈）の 3 項目，「ポイント 3. これからのことを皆で考えよう」が⑥展望の１項目である。

これらの項目を内包した IR 型授業研究の手続きを整理した「授業研究ハンドブック（案）」を開発した。このハンドブックを用いて，大きくは以下の試行を行った。その際，上記の要点を確認しつつ，ハンドブック（仮）の評価及び改善を図った。

試行１：IR 型授業研究の進め方に関する研修の実施

本試行において，参加者へのアンケートと，本研修に参画した授業研究などの校内研修に実務経験の豊かな行政関係者 K 氏へのインタビューを実施した。

試行２：和歌山県における小学校三校における予備調査の実施

この試行において，公立の小学校三校を訪問して IR 型授業研究を実施した。三校全てに参加した４名の研究協力者（中堅：現職派遣大学院生，ベテラン：大学院実務家教員）を対象にインタビューを実施した。

４．研究成果

(1)試行 A：参加者の IR 型授業研究に対する評価（アンケート）

本試行の参加者は，午前に IR 型授業検討含む座学を受講し，会場校にて授業を観察した。午後，その観察記録を基に，同授業研究について筆者から説明を受けながら，実際にワークショップを展開した。

参加者に，上述した３ポイントについて評価を求めたところ，アンケートの結果は，下記の通りとなった（5 件法，回収数 78）。

Q1.授業の観察法(記録法)はどの程度参考になったか…4.8
Q2.授業分析の方法はどの程度参考になったか…4.5
Q3.展望の提示法はどの程度参考になったか…4.6
Q4.学校内(他教科間含む)で使えそうな方法か…4.7
Q5.学校間で，教師が互いの教室を巡り合い学びあうためには有用か…4.6

概して言えば，参加者から，要件として内包された 3 ポイント 6 項目（IR 型授業研究）は高く評価された。この結果を踏まえ，K 氏にインタビューを行い，質的なデータを基に，IR 型授業研究における活動手続きに関する具体例を追記するなど，ハンドブックの改善を施した。

(2)試行 B：参加者の学びについて（インタビュー）

本試行において，実際に学校を察校訪問し，IR 型授業研究に取り組んだ参加者が，三回（三校で実施）を総括し，どのような学びを得られたかについてインタビューを実施した（N,S,Y,I の 4 名）。

まず，【IR のネットワークシステム】と【IR の授業分析方法】，【展望内容】は，IR の営みに組み込まれている活動そのものが学びとなった点であると考えられる（組み込まれた学び）。

次に，【見学して得た情報】は，IR の活動に直接は組み込まれてはいないものの，参画することで副次的に生じた学びであると考えられる。休憩時間などの時間に校内を散策し，図書を利用しやすい環境になっていることに気が付き，参考にしたいとのことであった（副次的な学び）。

そして，【自己理解の深化】，【個人的な思考内容】，【協同的な取組みの必要性】であるが，これらは IR においては目的化されてはおらず，そのプロセスに付随して生じた学びであると考えられる（付随的な学び）。詳細は，表の通りである（廣瀬・宮橋 2020:193）。

N	S	Y	I
①記録の仕方は面白く，一人では絶対できない【協同的な取組みの必要性】 ②分析を一緒にするっていうことは少なく，面白かった【協同的な取組みの必要性】 ③みんなで見合うことで共通の課題を見つけやすい【IR の授業分析方法】【協同的な取組みの必要性】 ④日本の研究協議とはまた違う方法ではないかなと思ったので，とても新しい目で（授業を）見ることができた【IR の授業分析方法】 ⑤指導主事育成の研修として取組む価値がある【IR の授業分析方法】 ⑥長期（な展望の提言）は言いにくいしその機会も少ないが，だからすごく面白かったし，このフォーマットは使える【IR の授業分析法】 ⑦視覚的に，付箋で（中略），授業者にとってもとても見やすい，分かりやすい【IR の授業分析方法】	①（クラス間で）共通性を見つけられること【IR の授業分析方法】 ②事前に学校研究の方向を聞いたが，方向性で共通点を見つけていくのは意味がある【IR のネットワークシステム】 ③話し方，聞き方，学び合というテーマであれば，（IR の授業分析法は）どことでもできる【IR のネットワークシステム】 ④観察眼を磨くためにはとてもよい方法【IR の授業分析方法】	①教師って結構話してしまうし，自分もそれくらい話してるのかもしれないと考えた【自己理解の深化】 ②S の記述量や見落としのなさは非常に勉強になった【協同的な取組みの必要性】 ③（S や N のようなベテランと）一緒に（データ整理や分析，展望構想）活動した経験がなく，（パターンの）見方や注目点が学べたことが一番【協同的な取組みの必要性】 ④普段の授業の協議会とは逆の流れ【IR の授業分析方法】 ⑤学校独自でするのではなく，外（他校の教師）の風を入れる【IR のネットワークシステム】	①客観的に物事を見る大事さを，まず一番に感じ，学んだ【IR の授業分析方法】。 ②難しいけども，短期，長期的な展望を，集約していく活動【IR の授業分析方法】 ③事実を見取ることは誰にでもできるし，（中略）教科に詳しい人とか関係なく，みんなのものになりやすい【IR の授業分析方法】 ④（これまでは）一個の事実から，自分の中で都合のいいように結論づけてしまって（解釈を）書き加えている。ほんとにそれが妥当なのかと疑問をもった【IR の授業分析方法】 ⑤自分の授業を振り返った。教師の良かれで行ってるが，子どもの立場に立って，もう一回その活動を見直す【自己理解の深化】 ⑥「あ，こんなことをしていったらいいんだな」は，明確になった【展望内容】 ⑦自分の課題が他の学校でも同じく課題で，学校なりその地域なりで，課題解決に向けて取組むことが必要【IR のネットワークシステム】 ⑧環境面で 3 校とも，図書に関して使いやすい仕組み【見学して得た情報】 ⑨自分の経験や課題が頭にあり，それについて見聞きしたこと【個人的な思考内容】

(3)まとめ

本研究は，専門的な学習共同体のネットワーク化に関する実証的な研究と位置付けられる。IR 型授業研究会は日本の教師にも高く評価されたこと（試行 A），そして日本の教師にとっても多様な学びが得られる手続きとなっていること（試行 B）が，明らかとなった。また，学校間で教師が学びあうことに資する可能性が高いことも確認されている（試行 A のアンケート，Q5.学校間で，教師が互いの教室を巡り合い学びあうためには有用か…4.6）。

以上の知見を踏まえ，要件となる 3 ポイント 6 項目をそのまま採用し，具体例や説明を精緻化した「授業研究ガイド」を開発するに至った。

【参考・引用文献】

City,E.A., Elmore,R.F., Fiarman,S.E.,& Teitel,L.(2011).*Instructional Rounds in Education: A Network Approach to Improving Teaching and Learning*. Harvard Education Press.

廣瀬真琴・宮橋小百合(2020)「学校間連携型授業研究ハンドブックの開発に関する基礎的研究」，鹿児島大学教育学部編『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第 71 巻,pp.187‐196.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 木原 俊行、長谷川 元洋、山本 朋弘、中橋 雄、今野 貴之、関戸 康友	４．巻 45
２．論文標題 学校における実践研究に対するオンラインコンサルテーション	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本教育工学会論文誌	６．最初と最後の頁 105-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15077/jjet.S45056	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 坂井武司・森 久佳・村井尚子・落合利佳・齊藤和貴・玉村公二彦	４．巻 4
２．論文標題 新しい時代の教育実習モデルの開発に関する研究：COVID-19の感染拡大下におけるオンライン教育実習の事例	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都女子大学 教職支援センター研究紀要	６．最初と最後の頁 27－35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森 久佳・坂井武司・村井尚子・落合利佳・齊藤和貴・玉村公二彦	４．巻 4
２．論文標題 実践報告 初等教員養成段階におけるオンライン教育実習に関する報告：実習アンケートの自由記述式回答の結果と先行事例との比較を踏まえて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 京都女子大学 教職支援センター研究紀要	６．最初と最後の頁 153－159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小久保 博幸・廣瀬 真琴・上仮屋 祐介	４．巻 31
２．論文標題 教職大学院におけるナラティヴ・アプローチの試み ：「学校における実習」の省察活動の充実に向けて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要	６．最初と最後の頁 134 -143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深見俊崇，木原俊行	4．巻 54
2．論文標題 中堅・ベテラン教師向けレジリエンス形成プログラムのデザイン	5．発行年 2021年
3．雑誌名 島根大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 池内 里美，合田 友美，木原 俊行，西田 好江	4．巻 44(1)
2．論文標題 米国における看護教員の授業力向上の取り組み	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Wellness and Health Care	6．最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深見俊崇	4．巻 2
2．論文標題 幼児教育における宇宙教育実践の方向性―遊びと科学教育からの検討	5．発行年 2021年
3．雑誌名 JAXA宇宙教育センター紀要	6．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮橋 小百合、川岸 俊夫、安井 健晃、九鬼 正志、古川 弘樹、服部 真子、川口 久仁、寺中 誠	4．巻 48
2．論文標題 有田川町内における学校循環型授業研究の推進	5．発行年 2020年
3．雑誌名 和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書	6．最初と最後の頁 196-201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤本禎男・宮橋 小百合	4．巻 5
2．論文標題 コロナ禍における初任者集合研修の工夫とその成果	5．発行年 2021年
3．雑誌名 学校教育実践研究	6．最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣瀬真琴・宮橋小百合	4．巻 71
2．論文標題 学校間連携型授業研究ハンドブックの開発に関する基礎的研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 187-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 木原俊行・島田希	4．巻 68
2．論文標題 教育委員会指導主事による校内研修のコンサルテーションの現状と課題	5．発行年 2020年
3．雑誌名 大阪教育大学紀要・総合教育科学	6．最初と最後の頁 123-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深見俊崇・木原俊行・小柳和喜雄・島田希	4．巻 43（Suppl.）
2．論文標題 教師のレジリエンス形成を促す研修プログラムの開発と試行	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本教育工学会論文誌	6．最初と最後の頁 177-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢野裕俊・田村知子・森久佳・廣瀬真琴・深見俊崇・小柳和喜雄・木原俊行	4．巻 29
2．論文標題 研究開発学校におけるカリキュラム開発の経験-教師の専門職資本形成に注目して-	5．発行年 2020年
3．雑誌名 カリキュラム研究	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中山眞弘・宮橋小百合	4．巻 4
2．論文標題 若手教員育成に向けた校内研修体制の構築	5．発行年 2019年
3．雑誌名 学校教育実践研究	6．最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中山眞弘・宮橋小百合・糸賀直人	4．巻 4
2．論文標題 道徳科における「深い学び」を実現するカリキュラムデザイン	5．発行年 2019年
3．雑誌名 学校教育実践研究	6．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣瀬真琴、森久佳、宮橋小百合	4．巻 70
2．論文標題 Instructional Roundsの日本における試行と評価	5．発行年 2019年
3．雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 249-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥山茂樹、廣瀬真琴、山元卓也	4．巻 70
2．論文標題 指導主事の力量向上に関する基礎的研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要	6．最初と最後の頁 231-238
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮橋小百合	4．巻 3
2．論文標題 初任者研修を核としたPLCの形成が学卒院生の実践力育成に与える影響	5．発行年 2018年
3．雑誌名 学校教育実践研究（和歌山大学教職大学院紀要）	6．最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中山眞弘、坂本善光、西浦民子、宮橋小百合	4．巻 3
2．論文標題 小規模校における「対話的で深い学び」の構築に向けた実践と課題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 学校教育実践研究（和歌山大学教職大学院紀要）	6．最初と最後の頁 55-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 廣瀬真琴・宮橋小百合・木原俊行・森久佳
2．発表標題 Instructional Rounds の試行に対する指導主事からの評価
3．学会等名 日本教育方法学会
4．発表年 2021年～2022年

１．発表者名 宮橋小百合、廣瀬真琴、木原俊行、深見俊崇
２．発表標題 Instructional Rounds を用いた小規模校間における初任者育成の組織化に関する検討
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 矢野裕俊・田村知子・森久佳・廣瀬真琴・深見俊崇・小柳和喜雄・木原俊行
２．発表標題 研究開発学校におけるカリキュラム開発の経験 -教師の professional capital 形成に注目して-
３．学会等名 日本カリキュラム学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬真琴・森久佳・深見俊崇・宮橋小百合・木原俊行
２．発表標題 Instructional Rounds における学びの分析
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬真琴、森久佳、木原俊行、深見俊崇、宮橋小百合
２．発表標題 Instructional Roundsにおける授業分析法の可能性と課題
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hisayoshi Mori, Hirotoshi Yano, Tomoko Tamura
２．発表標題 School Based Curriculum Development (SBCD) in Pilot Schools: A Japanese Strategy
３．学会等名 The 6th World Curriculum Studies Conference (IAACS) 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

１．著者名 深見俊崇、廣瀬真琴、木原俊行、島田希	４．発行年 2020年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 144
３．書名 教師のレジリエンスを高めるフレームワーク	

１．著者名 梶田叡一、浅田匡、古川治、矢野裕俊	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 288
３．書名 人間教育をめざしたカリキュラム創造	

１．著者名 日本カリキュラム学会(編)	４．発行年 2019年
２．出版社 教育出版	５．総ページ数 402
３．書名 現代カリキュラム研究の動向と展望	

1．著者名 伊藤奈賀子、中島祥子、廣瀬真琴、他12名	4．発行年 2019年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 292
3．書名 大学での学びをアクティブにする アカデミック・スキル入門〔新版〕	

1．著者名 吉崎静夫、村川雅弘、木原俊行	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 228
3．書名 授業研究のフロンティア	

1．著者名 原田信之、田村知子、森久佳、冨田福代、細尾萌子、渡邊あや、野澤有希、池田充裕	4．発行年 2018年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 244
3．書名 カリキュラム・マネジメントと授業の質保証	

1．著者名 古川治、矢野裕俊	4．発行年 2019年
2．出版社 北大路書房	5．総ページ数 272
3．書名 改訂新版　教職をめざす人のための教育課程論	

１．著者名 稲垣忠、市川尚、小林祐紀、佐藤靖泰、菅原弘一、寺嶋浩介、成瀬啓、深見俊崇、森下孟	４．発行年 2019年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 244
３．書名 教育の方法と技術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	森　久佳 (MORI Hisayoshi) (00413287)	京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305)	
研究分担者	木原　俊行 (KIHARA Toshiyuki) (40231287)	大阪教育大学・連合教職実践研究科・教授 (14403)	
研究分担者	矢野　裕俊 (YANO Hirotoshi) (80182393)	武庫川女子大学・教育学部・教授 (34517)	
研究分担者	宮橋　小百合 (MIYAHASHI Sayuri) (80461375)	和歌山大学・教育学部・准教授 (14701)	
研究分担者	深見　俊崇 (FUKAMI Toshitaka) (80510502)	島根大学・学術研究院教育学系・教授 (15201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関